

「観光年」はビルマに何をもたらすのか

軍事政権による民主化勢力への弾圧が続くビルマ。この国では、アウンサンソーチー氏を中心に民主化運動を進める国民民主連盟(NLD)と、一九九〇年の総選挙の結果を無視し、軍事力を背景に政権に居座り続ける国家法秩序回復評議会(SLORC)との深刻な対立が続いている。

九月二十六日深夜、SLORCは、NLD創立八周年を記念する集会を阻止するため、アウンサンソーチー氏宅に通じる道路を封鎖し、NLD議員を含む一〇九人の民主化活動家を拘束した。対話による政治的な解決よりも、あくまでも軍事力に押さえ込みをもくろむ今回の措置には、これまでSLORC寄りの発言をしていたアセアン諸国からも異論が出始めた。今夏まで、ソーチー氏宅前の週末の演説集会には、常に五〇〇人以上の聴衆者が参加していた。ところが、ここ数週間は、SLORCの締め付けにより、集会への参加者は一五〇〇人規模へと縮小していた。

観光年を進めるSLORC

ここ数年の、GNP成長率八%という高い経済成長を自信として、不法に政権にしがみついているSLORCは、今年十一月十八日からの「ミャンマー観光年」を成功させることで、ますます政権維持の正当性を内外にアピールしようとしている。そのような動きに対してソーチー氏側は、SLORCの進める「観光年」は、決して国民に利益をもたらさない外貨獲得の政策であり、何よりも不法な政権を認めることにつながるとして、SLORCの進める「観光年」に反対している。

また、「観光年」を進めようとするビルマ以外の国の観光資本は、ビルマに観光客が入ることで現地に外貨が落ち、それによって多くの人が恩恵を得、また外国人が入ることでSLORCによる情報統制にも限界ができ、いずれはビルマもよい方向へ変わっていくのだという主張をしている。SLORCのある閣僚は、「昨年までの実績からして、日本が

らの観光客が一番多いだろう」と語っている。

では、軍事政権の進める「観光年」の実態はどういうものなのか。ホテルの建設ラッシュが進む首都ラングーンを離れ、観光客の受け入れ準備の進む地方都市へ足を運んだ。

首都ラングーンから東へ約一八〇km、モン州チャイトー山にあるチャイトーヨバゴダは、ビルマ国内の仏教徒たちの巡礼地として有名である。黄金に輝く岩の上に高さ7・3mのパゴダ(卒塔婆)が天を突き刺すかのように建っている。ラングーンのエタダゴンパゴダ、マンダレーのマナムニバゴダと並んでこのチャイトーヨバゴダは、ビルマでもっとも神聖とされる巡礼地のひとつである。

チャイトー山は、自治権獲得のため武装闘争をしていたカレン人・モン人が支配していた地域の近くにある。内戦状態が続く、実際に戦闘が行われていた二三年前までは、この地を訪れようとする外国からの観

光客は、首都で通行許可証を手に入  
れ、兵士の同行を必要としていた。  
モン人との停戦が合意し、カレン人  
とも和平準備が進み始めた現在、乾  
季に限り簡単にチャイトー山頂にあ  
るパゴダまで行くことができるよう  
になった。圧倒的な軍事的で「少数  
民族」問題に方を付けた S L O R C  
は、ようやくチャイティーヨパゴダ  
を外国からの観光客に売り出すこと  
となった。

「チャイティーヨパゴダを拝めるか  
どうかは運の問題だ。雨季の激しい  
雨で道路は封鎖されているし、運良  
く工事用のトラックに乗ってきたと  
しても、頂上は濃い霧のためほんの  
目の前も見えないくらいだ。パゴダ  
がはつきり見えるかどうかはわから  
ないよ……」。山の麓のペー  
スキャンプで聞いた話であった。

### 観光年のために働く子どもたち

工事関係者と交渉し、二〇〇チャ  
ット払うことで工事用のトラックに  
同乗させてもらうことができた。工  
事関係者と村人を満載したトラック  
は、雨季の激しい雨でぬかるんだ山

道を、エンジンをうならせながら上  
がっていく。タイヤは泥で滑り、幾  
度となくトラックはひっくり返りそ  
うになる。

約一時間ぐらい走った頃、三〇人  
くらいの村人が急な山道を補修して  
いるのが見えた。雨の中をずぶぬれ  
になりながらブロック石を敷き詰め  
る作業をしていた。まだ幼い顔をし  
た子どもも多く見かける。写真を撮  
ってもいやがる風でもなく、淡々と  
作業を続けていた。

ジャーナリストが多くうるつく首  
都ランゲーンでは、工事にかり出さ  
れた子どもたちの姿を写真に撮って  
いると、必ずといっていいほど現場  
監督にじやまをされた。だが、ここ  
ではそんなことはなかった。それど  
ころか、「一日働いて、子どもなら  
五〇チャット、大人なら八〇チャッ  
トの稼ぎだよ」と現場監督らしき男

は教えてくれた。町の食堂で、焼き  
そばや焼きめしが、それぞれ三〇〜  
五〇チャットくらいだから、彼らの  
稼ぎは、一日の食事代しかならない。

ちなみにビルマの為替レートは、  
公式で一米ドル＝約六チャットであ

るが、一〇月初めの市中のブラスク  
マーケットでは、一米ドルが約一五  
〇チャット以上になる。S L O R C  
がいかに外貨を欲しているかが明ら  
かである。

夜明けのパゴダを写真に撮ろうと  
思い、朝五時半に起きて土砂降りの  
雨の中をパゴダに向かう。濃い霧の  
中、雨でびしょぬれになった人びと  
が参道修理のための煉瓦運びをはじ  
めている。ビルマの人は、年齢のわ  
りに若く見えるが、それでも、どう  
見ても一〇歳前後の子どもたちが煉  
瓦を運んでいる。天秤にかついだ煉  
瓦の重みで顔をゆがませている少  
年。頭に乘せた重たい煉瓦を細い腕  
では支えきれず、身体をブルブル震  
わせている女の子。みんな夜明け前  
の真つ黒なうちから大粒の雨に打た  
れながら仕事を始めている。

「観光年」を成功させるために当  
然のように働いている子どもたち。

道路が完成し、さわやかな風の吹く  
乾季にビルマを旅する外国からの旅  
行者には、厳しい状況の下で働いて  
いた姿は想像できないであろう。

開放政策を取り入れ、外国人を国内に入れることよつてその国の現実を変えていこうという一部にある考え方は、ビルマにおいては通用しないように思える。決まつた観光ルートだけに乗り、お金だけを落とすていく観光客。S L O R C はそういう外国人だけを求めているのだから。

△写真キャプション▽

・開発めざましい首都ラングーンの裏通りにはスラムができつつある（一九九六年六月）

・景観を台無しにするオフィスビルの建設が進む首都ラングーン（一九九六年7がつ）

・政府軍からの博雅を逃れてタイ・ビルマ国境に逃れてきたばかりの「少数民族」の家族。（一九九六年六月）

・朝五時半過ぎ、土砂降りの雨の中、煉瓦を運ぶ女の子（一九九六年六月）